

諫早市こどもの城
実績報告書 Vol.11

～思春期とこどもの城～

令和元年度

「思春期とこどもの城」

今回は、こどもの城において、思春期の子どもたちや親が利用されていることについて、その内容の一部を紹介します。こどもの城が開館して11年。開館時に小学校6年生だった方々は、今では、23歳になります。親としてこどもの城を利用されても、何の不思議もありません。思春期の子どもたちについて考えてみることは、次世代の親や子どもたちについて考えることに繋がるように思います。

第1章 「諫早市の子育て～『切れ目のない支援』」

諫早市では、第二次諫早市総合計画において、基本政策として「健やかなひとづくり」を掲げています。その展開の中で、「結婚、妊娠、出産から子育てまでの切れ目のない支援体制の構築を図ることで、誰もが安心して子どもを産み育てることができるまちづくりを目指します」と記されています。

このうち、こどもの城においては「子どもたちへの体験活動の機会を提供するとともに、親や指導者の体験学習への理解を深め、既存の枠組みを超えた充実した子育て・教育環境の構築」の役割を担っています。こどもの城は親子で利用されるのが主ですが、いろんな世代の方も利用されます。中には、高校生だった頃にボランティアをされ、母親になってから利用されている方もおられます。支援に繋がっているかどうかはさておき、その方にとっては、まさに切れ目のない利用になっています。

いずれ、幼少期から、こどもの城を利用している今の子ども達が、親になって利用されるケースも出てくると思います。今から、楽しみでなりません。その間に、思春期を通るのですが、こどもの城として何ができるのかを考えてみることも、切れ目のない支援に繋がれば良いと考えます。

乳幼児と親以外もこどもの城を利用している

こどもの城利用者の多くは、乳幼児とその親ですが、実際には高校生や中学生が団体として利用していることもあります。また、小学校高学年のPTAの活動として利用していることもあります。同じ日に利用された方から、「大きなお兄さん、お姉さんも利用できるのですね」とスタッフが語りかけられることもあります。そんな時は、「施設の名前には、こども（子ども）が入っていますが、誰でも利用できるのですよ」と返します。そもそも、思春期も、未成年という見方からすれば、子どもにあたります。このように、こどもの城は誰でも利用できるので（団体として利用できるのは、諫早市民を含む場合のみ）。

過去に利用（講師派遣）した学校

さて、どれくらいの学校が、これまでこどもの城を利用されたのか、ここでは、過去11年間で、団体としてこどもの城を利用した（あるいはスタッフが出前に行った）諫早市内の中学校・高校（PTAを含む）を以下に記してみます。

【中学校】・・・小長井中学校、明峰中学校、西諫早中学校、北諫早中学校、諫早中学校、長崎日大中学校、諫早特別支援学校中学部、長田中学校、高来中学校、森山中学校、諫早東特別支援学校中学部、飯盛中学校、真城中学校

【高等学校】・・・諫早高校、鎮西学院高校、長崎日大高校、諫早農業高校、創成館高校、西陵高校、希望が丘高等特別支援学校

また、講師としてスタッフを派遣した市外・県外の中学校・高等学校は、県内の小浜高校、大村城南高校、長崎大学附属中学校など32校あります。

このように、多くの中学校や高等学校がこどもの城を利用したり、スタッフを講師として学校に派遣したりしてきました。生徒を対象とした体験学習や講話、教師を対象とした研修、保護者を対象とした講話など内容は多岐にわたりますが、共通しているのは、思春期の子どもをめぐるテーマであるということです。第二章以降では、その実例を紹介してみます。

第2章 「実例その1～中学生・高校生の部活動」

「中学生や高校生がこどもの城に来て、一体、どんなことをしているの？」とよく訊かれます。実は、こうした思春期の生徒たちが、こどもの城で体験学習の手法を用いた課題解決活動や心を解放して遊ぶ活動などを展開しているのです。

本章では、部活動として、こどもの城を活用されている事例について紹介してみます。

メンタルを強く？

第1章でも紹介した学校の部活動の中には、県内でも強豪と言われる部活動があります。興味深いことに、そういった強豪校が、乳幼児やその親がたくさん集まるこどもの城に、心（メンタル面）を磨きに来ているのです。

中には、大会では、シード権を獲得するような強いチームも含まれています。こういった強いチームは、準決勝や決勝に進出し、その舞台上でレベルの高い別のチームと対戦する可能性が高いものです。指導者の方に聞いた話によれば、実力が拮抗する中で勝敗を分けるのは、やはりメンタル力だそうです。興味深いことに、その力をこどもの城に求められているのです。

プログラムが始まると、こどもの城では、最初に参加者（中学生や高校生）と目的を共有します。ある高校生との会話です。

スタッフが問います。

「今日は、こどもの城に何をしに来たの？」

高校生が答えます。

「メンタルが強くなるように来ました。よろしくお願いします。」

当たり前の内容の会話ですが、この応答の過程から高校生を引き込むように努めることが大切だと感じています。目的は事前に指導者の方と打ち合わせて把握をしており、主役である高校生自身も理解をしているのですが、あえて命題を一度疑ってみる作業を取り入れるのです。この場合は、「メンタルは強くならなければいけないのか？」という投げかけです。そして、「それは監督やコーチだけでなく君たちも思っているのですね？」という問いかけです。

いつも、弱い方が負けるの？

高校生との会話の続きを紹介します。

スタッフがさらに問いました。

「メンタルを強くするということは、今は、君たちのメンタルは弱いのか？」

高校生の中に少しざわつきが起きます。

「強い人もいれば、弱い時がある人もいます。実際に、練習試合では負けて、監督からメンタルが弱

いと指摘され、キャプテンとしてもそう思います。」

「じゃあ、メンタルを強くして試合に臨んで、勝ちたいの？」

「そうです！」

「そうなんだね。君たちの気持ちはわかった。でも、こどもの城に来て、君たちの種目の練習はしないよ。こどもの城というところは、大人も子どもも遊びながら学ぶ場所だよ。それでいいの？」

大抵の高校生は、この「遊ぶ」という言葉で一旦、詰まります。彼（彼女）らにとって部活動は、ルールに基づき、青春をかけた自己鍛錬や他者との競争の場であり、「遊び」という言葉からイメージされる自由闊達な雰囲気からほど遠いからです。実は、これが、こどもの城の手法の一つで、最初に固定化された概念を疑ってみたり、崩したりする作業を入れ込むのです。そして、高校生が語ったことにも切り込みます。

「ねえ、メンタルが弱くちやダメなの？」

「弱い方がいつも負けるの？」

よく考えてみれば、突拍子もない発想です。高校生は、日々、自己を研鑽して強くなろうとして、厳しい練習に励んでいるのですから。しかし、こどもの城で特別なプログラムをするということは、いつもと違った場所での練習ですから、少し突飛な考え方も投げかけてみます。そして、主役である高校生自らが、今の自己の状態を認めつつ、未来への希望を高めていくことにつなげたいのです。

実は、この「弱い方がいつも負けるの？」という“魔法”にかかった高校生が、直後の大会で躍進を遂げたという事例が数例あります。試合後に、「固定観念に縛られすぎて、結果、自分自身を認めていませんでした。時間を区切った（前述の下線部分）考え方にもふれて楽になりました。」と高校生が語ってくれました。なんだか、子育てが楽しくなっていった親の心理に似ています。

素人だからこそその発想による練習法

ずいぶん昔の話ですが、部活動などスポーツの場面では、現在と違う指導法が用いられていました。例を挙げてみると、「水を飲むな」や、「肩が冷えるから野球選手は泳いではいけない」や、「ランニング中に水を飲むとお腹が痛くなる」などです（現在では、野球では登板を終えた投手はアイシングをしていますし、駅伝やマラソンでは給水ポイントがあります）。運動生理学としては非科学的とされているこれらのような指導法が常識とされていました。しかし、スポーツにおける心理の分野は、幅が広く、様々な手法が有効であることも多いと感じます。そこで、こどもの城では、中学生や高校生の当該種目を経験していないスタッフでも担当し、あえて素人の発想でプログラムを展開することも多いのです。そもそも、こどもの城には、野球、バレーボール、剣道、カヌー等を経験したスタッフはいますが、サッカー、卓球、バドミントンなどの部活動を経験したスタッフはいません（スポーツではありませんが、吹奏楽の経験者もいません）。実際には、スタッフが経験していない種目の部活動をこれまでに受け入れてきました。そこでは、素人ならではの発想による練習法がスタッフから提案され、実施してみたら「これは普段の練習でも取り入れたい」とされたものもあります。

例えば、バドミントン部のプログラムです。バドミントンに限らず、テニス、バレーボールなどネットを挟んで相手と対する競技では、「先に、〇〇点を 取った方が勝ち」というルールで試合が行われます。したがって、普段の練習でも、試合形式の練習をする場合、実践に近い形で行われることが多いようです。バドミントンの試合形式であれば、コートの中に入るのは、二人（ダブルスであれば四人）です。その時、他の部員は、応援したり素振りをしたりして他の 練習をすることになります。「先に、〇〇点を取った方が勝ち」というルールの下では、試合時間が大きく異なります。限られた部活動の時間内で多くの部員が、試合形式の練習を行うには非効率になる場合もあります。そこで、素人の発想を投げかけてみました。

「1点取られたら交代するというのは、どうかな？」

実際にやってみたところ、この発想が意外にも練習にスピード感を生み、多くの部員の試合形式の練習量が確保され、他の部員は交代した選手のコート側に素早く移動して応援をするというルールも取り入れたところ、チームの一体感も高まりました。ちなみに、直後の大会でも好成績を収めたそうです。

固定観念を超えて発想を展開してみると、意外な成果を生んだ例です。これもまた、なんだか子育てに似ています。

第3章 「実例その2～中学校の人権学習」

こどもの城では、中学生や高校生のプログラムを受け入れるだけでなく、学校へ出向いて授業をする場合があります。本章では、学校へ出向いて行う授業の中で、中学校の人権学習で語ったり行ったりした内容について紹介してみます。

毛虫を踏み潰した話

中学生に語るときには、実際にあった話を再現すると、よく聴いてくれることが多いものです。学校へ出向いたスタッフは、そういった実話の中にある教育的な要素を語るがよくあります。そういったエピソードの一例を紹介します。

ある夏の日、こどもの城の屋外デッキで数家族が集まっていた時のことです。子どもたちの笑い声が響く中、ふと傍の木を見たお母さんが悲鳴をあげました。その時、木の幹に毛虫がたくさんいたのです。毛虫に毒があると思った親から、「近づかないで！」や「気持ち悪い！」という声が聞かれました。ほどなくして、“勇敢な”親が出てきて毛虫を踏みつぶし、周囲のお母さんたちから拍手が沸き起こりました。

しかし、この時の毛虫はモンクロシャチホコという蛾の幼虫で、実は毒がありません。その場にいた親たちは知りませんが、近くでその光景を目にしたこどもの城のスタッフは、毒がないことを知っています。親が無用な殺生をしたのではないかという疑念が湧きました。それどころか、皆で拍手をしている姿に恐怖を感じ、思わず叫びました。

「この虫には毒がありません！」

知らない(知ろうとしない)から、気持ち悪そうだからといって、命を奪ってしまうことがいいのか、互いを理解するために一步踏み込んでみる方がいいのか、中学生に考えてほしい話題です。「毛虫＝気持ち悪い」というのは、思い込みの場合も多いものです。思い込みを一旦取り除いて考えてみることは、自身の可能性を広げることにも繋がるような気がします。

「おっていいぞ(いいよ)」ということかな？

人権とは、一般的には「人間が人間らしく幸せに生きていくための権利(公益財団法人 人権教育啓発推進センター「人権について考える」より)」と言われます。おそらく中学生は、学校でこのように学んでいることだと思われれます。

こどもの城のスタッフが学校に出向くのは、そういったベースの上に授業を依頼される場合です。そこで、すでに学んでいる人権について、スタッフなりの異なる表現で中学生に語りかけることもあります。例えば、事前に当該校の教師から、生徒どうしの無視する行為があったなどという情報が得られた

場合などは、「人権って、『おっていいぞ』ということかな？」などと投げかけることです。この事例は、無視という行為、つまり、心の中から対象となる相手の存在を消す行為について、中学生自身に考えてほしいため、このような表現方法を投げかけてみました。前述した毛虫の話題と合わせて語りかけることもあります。

一度学んだことについて異なる表現方法で考えてみることで、とりわけ会話調の表現は、中学生にとって理解を深めたり心に響いたりすることも多いと感じています。

体験学習の要素を取り入れて

こどもの城のスタッフが学校に出向く場合は、定められた時間数の中で、一方的な講話でなく、可能な限り体験学習の要素を取り入れて授業を展開しようと試みます。ここで言う体験学習の要素は、指導者が教えることよりも、生徒自らが考えることを重視するということを指します。かつては、人権学習では教材を読んだり、映画を鑑賞したりという手法が主だったようですが、近年は、体験的な活動を通して、生徒自身が様々な意見を出し合ったり、他者の意見を受け入れたりする手法も取り入れられるようになったと感じています。

一例をあげると、導入の段階などで、「誕生日順に並んで」という活動を取り入れてみます（一般的には「ラインナップ」という名称で、コミュニケーションプログラムなどではよく用いられる活動）。その際にも、あえて、誕生日のことを「命の記念日順に並んで」という表現方法に変えてみます。生徒から「えっ？」という反応が出たときに、『命の記念日』だよ。だって、皆に等しく1回あって、この学級（学校）は、誰もが（いて）いいんだよね。」などと返しますが、生徒に響いたのではないかという手応えを感じることがあります。このように、先述した話題と体験学習の活動が人権学習の効果を高めることがあるようです。

第4章 「実例その3～高校生の職場体験」

本章では、高校生の職場体験でのエピソードを紹介します。令和1年度現在、こどもの城には、諫早市内にある創成館高等学校の2年生（希望者）が、授業の一環として、職場体験に来ています。こどもの城に来る高校生が、例えば保育士を目指すなど明確な目標を持っている生徒に限るということではありませんが、毎年、10名程度の生徒が体験に訪れます。

過去に、こどもの城に来た生徒の中には、野球で全国大会（春や夏の甲子園）に出場したり、有名な俳優になったりしている生徒たちがいます。体験期間中にスタッフが生徒との面談を行っていますが、子どもや親とふれあうことを通して、自信がついた、堂々と表現できるようになった等、得られるものが多くあるようです。

赤ちゃんを抱くこと

こどもの城では、利用者対応の体験をしますが、その一環として、赤ちゃんを抱くことがあります。少子化が進んだためか、地域でよその子を抱く機会が無くなったためか、初めて赤ちゃんを抱く高校生も多いようです。始めは、肩に力を入れてぎこちなく抱いていても、そのうち、赤ちゃんの可愛さを実感します。中には、慣れた方が「いいよ、うちの子で練習してみて。」などと応援してくれる親もいます。現在、高校生がこどもの城に体験に来るのは平日なので、主な利用者は、乳幼児とその親になるため、このような体験ができます。

このことは、お母さんの手や心を休める効果とともに、高校生自身にとって、自分が他者から頼られる存在であることを体感できます。

「遊んであげる」から「いっしょに遊ぶ」へ

また、利用者対応の一つとして、幼児とともに遊ぶこともあります。高校生が体験に来る平日であっても、夕方には園から帰ってきた幼児が利用する場合があります。幼児にとって、高校生は最高の遊び相手であるかのように、瞬く間に物理的な距離を縮め、同時に心理的な距離も縮まるようです。

一方で、幼児の遊びは、高校生が日常ではやらないもの（かつて自身が幼児期にやったもの）が主なため、高校生には若干の戸惑いがある場合もあります。例えば、男子高校生が女兒とともに、ままごとをやる場合など、見ているスタッフも思わず笑いがこぼれそうになります。女子高校生が絵本を読んでくれと頼まれる場合などもよく見られます。高校生たちは、最初は苦戦しつつも、なんとか子どもたちに受け入れられているようです。遊びを通して、高校生が子どもたちになりきり、子どもたちと同じ感覚で遊びこむようになることを子どもたちが感じているかのようです。こういった感覚を体験する時、高校生の中では「遊んであげる」というよりも「いっしょに遊ぶ」という感覚になっているようです。別の言い方をすれば、「遊んであげる」という気持ちでは、子どもたちに見透かされてしまう感じのようです。「最初は、どこかよそよそしい態度の子どもだと思っていた子どもが、私の横にずっといるようになりました。もしかしたら、よそよそしかったのは、子どもではなく私だったのかもしれない」とい

う感想を抱いた高校生もいました。

このような高校生の感覚は、子育てにも役立ちそうです。子どもたちは、いっしょに遊ぶ高校生の言ったことをよく聞きますし、「毎日、職場体験に来て！」と高校生に頼む(?)親もいるくらいですから。

自分の価値を感じる

情報化が進んだ現代においては、かつてあまり聞かれなかった各種のデータを高校生が閲覧することもできます。スポーツ(大会)の成績のほか、中には学校の偏差値がランキングされている情報もあります。もしかしたら、思春期の青少年は、他者との比較の中で現在の自分の位置を確かめるなど過度に気になっているのかもしれない。

しかし、先のような赤ちゃんを抱く体験など他者から頼られることは、他者と比較する(される)ことと異なり、自己の価値を実感できるという効果があるようです。併せて、もしかしたら将来、自分自身も親になるかもしれない

存在であるということを実感できます。まるで、赤ちゃんの可愛さが高校生を育てているかのようです。

子育てに悩む親も、このような高校生の姿を見て、子育ての楽しさや自分の価値を感じる体験を取り戻すことができるように、今後も、高校生の職場体験をこどもの城で受け入れたいと思っています。